

## アメリカ合衆国の産業構造の変化に伴う都市構造の変化

東京学芸大学教授 矢ヶ崎 典隆

### ★ 変化する産業構造

アメリカ合衆国（以下、アメリカ）では20世紀後半に産業構造が変化した。このような動向は、脱工業化社会、経済のサービス化、情報化社会などの表現でしばしば語られてきた。20世紀にアメリカが世界最大の工業国に発展したのは、鉄鋼の生産を基盤とした重工業のおかげであった。しかし、国家経済に占める第2次産業の比重が低下し、第3次産業を中心としたサービス経済が主役を演じるようになった。物を作る経済からサービスを提供する経済への転換が起きたわけである。世界に先駆けてアメリカで進展した情報技術革命は、このような社会・経済の変革を促進するものであった。

産業構造の変化は、都市構造に関して2種類の地理的变化を引き起こした。まず国家スケールでみると、アメリカ経済を主導した北部の伝統的な工業都市において重工業が衰退する一方で、北緯37度の南側に広がる地域では情報通信技術関連の新しい産業集積地域が発展した。すなわち、産業構造の変化は、サンベルトの発展とスノーベルトの衰退という地域現象を促進した。

もう一つは都市スケールにおける変化である。産業構造の変化に伴って、製造業が集積していた都心周辺部で産業活動が衰退し、失業者の増加や住環境の悪化がインナーシティ問題を深刻化させた。一方、郊外にはビジネス、商業、情報通信技術産業の新しい拠点が設けられ、新しい住宅地が形成された。こうした都市機能の郊外化によって郊外がますます繁栄すると、都心部と郊外の分断化が進んだ。

### ★ スノーベルトの衰退とサンベルトの発展

19世紀から20世紀前半にかけての工業化の時代に主役を演じたのは、大西洋岸北部から五大湖沿岸にかけて分布する工業都市であった。このような工業都市は、近隣で産出される鉄鉱石と石炭を基盤として発展した。

鉄鋼や自動車をはじめとする機械類の生産が盛んになった。たとえば、ピッツバーグは鉄鋼業の中心地となり、アメリカのバーミングハムとよばれた。デトロイトはモーターシティとよばれ、自動車の都に発展した。19世紀から20世紀初頭にかけて流入したヨーロッパ移民は、低賃金で働く単純労働者として工業都市に吸収された。大量生産・大量消費の時代が到来し、この国は経済的に世界で最も豊かな国になった。

しかし、第二次世界大戦後、日本やドイツの経済が復興し、安価で良質の鉄鋼、自動車、機械類が輸入されるようになると、北部の伝統的工業都市は厳しい国際競争に直面した。強い労働組合の存在は労働者に高い賃金を保証したが、このことが品質競争と価格競争においてアメリカ製品の競争力を弱める一因となった。また、1970年代の2度の石油危機は、伝統的工業都市の衰退を促進した。相次ぐ工場の閉鎖によって多数の労働者が失業した。税収の減少によって中心市の財政が悪化すると、都心周辺部において住宅環境の荒廃、犯罪の増加、教育環境の低下など、インナーシティ問題が深刻化した。

1970年代には、北緯37度線より南の温暖な地域が脚光を浴びるようになった。ここには、宇宙産業のように新たに始まった産業もあるが、多くは北部の伝統的工業都市から移転した産業である。石油危機を経験すると、温暖な気候は魅力的であった。州政府は積極的に企業を誘致した。労働組合に加入しない労働者の存在は、企業経営者にとって魅力的であった。こうして南の温暖な地域はサンベルトとよばれるようになり、北部（スノーベルト、フロストベルト）から人も企業も移転した。ジミー・カーター以降の大統領はサンベルトの出身で、この地域の政治的発言力も増大した。

サンベルトの工業地域の特徴は、シリコンヴァレーに代表されるように、広域な地域に情報技術関連産業が集積していることである。この産業は、鉱産資源ではなく、高度な教育を受けた人材を求めて立地する。そのため大学などの研究教育機関の存在は重要である。

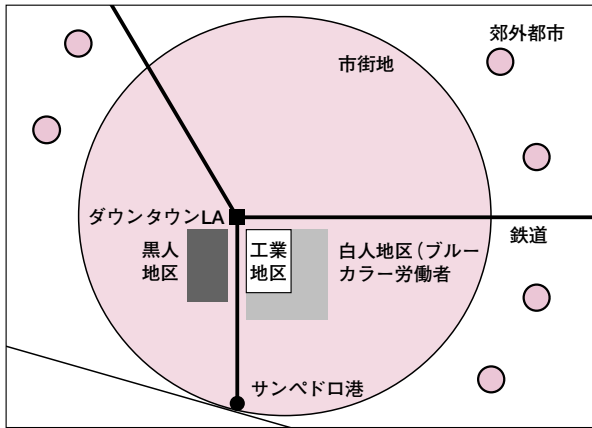


図1 1960年代までのロサンゼルス都市構造  
(矢ヶ崎作成)

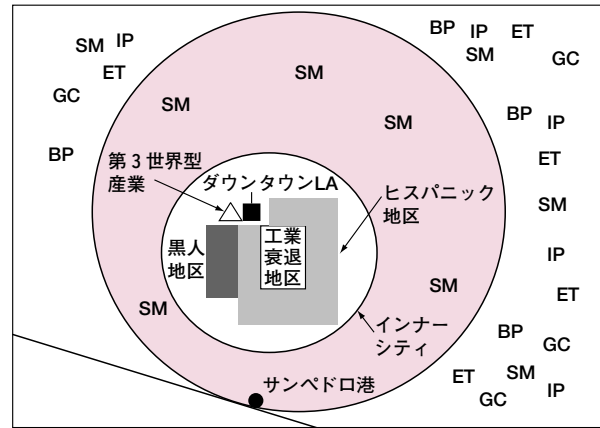


図2 20世紀末以降のロサンゼルス都市構造  
BP: ビジネスパーク SM: ショッピングモール  
IP: 工業団地 ET: エスニックタウン  
GC: ゲート隔離住宅地 (gated community)  
(矢ヶ崎作成)

1960年代に移民法が改正されるとアジアからの移民が増加したが、中でもインド系や中国系などの人材は情報技術産業で活躍し、サンベルトの発展に貢献している。

### ★ 都心周辺部の衰退と郊外の発展

産業構造の変化が都市スケールにおいて及ぼした変化について、ロサンゼルス大都市圏を事例に述べてみよう。このアメリカ最大の総合的工業都市では、都心周辺部における産業の衰退と郊外における産業の発展が同時に進行してきた。

図1は産業構造が変化する前のロサンゼルス大都市圏の都市構造を示したものである。1960年代まで、都心部(ダウンタウンLA)の南に工業地区が立地し、鉄鋼、自動車、タイヤ、ガラス、機械などの工場が集積していた。その周りには中産階層の整然とした住宅地が形成され、ブルーカラーの白人労働者が居住した。都心とサンベドロ港を結ぶ鉄道を境にして、西側には黒人地区が存在した。連続した市街地の外側にいくつもの郊外都市が立地した。

図2には産業構造が変化した後のロサンゼルス大都市圏の都市構造が示される。産業構造の変化に伴って工業地区で工場が相次いで閉鎖されると、白人労働者は郊外に転居し、かわりにヒスパニックが占拠するようになった。住民の入れ替えが起きたわけである。ヒスパニック住宅地は、新たな流入人口を吸収しながら、さらに周辺へと拡大している。なお、都心部では、新しい移民労働力を活用した衣料縫製産業が発展してお

り、都心部の再開発の原動力となっている。これは第3世界型(労働力搾取型)産業地区とよぶことができる。

一方郊外では、新しいビジネスパーク、巨大ショッピングモール、工業団地が建設され、ビジネス・商業活動が活発化し、情報技術関連企業の集積がみられる。富裕層が暮らすゲート隔離住宅地は郊外に登場した新しい居住形態である(写真1)。また、1970年代以降に流入した移民が生活する新しいエスニックタウンも郊外に立地する。



写真1 ロサンゼルス郊外のゲート隔離住宅地  
門の向こう側の丘陵地に高級住宅が建ち並ぶ。  
(矢ヶ崎撮影)

以上のように、産業構造の変化はアメリカの都市構造に大きな変化をもたらした。ロサンゼルス大都市圏はこのような変化を理解するための最適な事例である。

文献 矢ヶ崎典隆 (2007): ビデオ教材制作による地誌教育の試み, 学芸地理, 62:1-12.

矢ヶ崎典隆 (2008): 都市構造に着目してアメリカ合衆国の地理を考える, 新地理, 56(1):38-43.